

# 「特救隊」としての気概を心身にたたき込む!

毎年4月から7カ月間、新人研修隊員は特殊救難隊員として必要不可欠な知識・技術・体力の基本を集中的に体にたたき込む「特殊救難業務研修」（通称：新人研修）を受けます。特殊救難隊の証である「オレンジベレー帽」を目指して、平成28年度は5名が奮闘中です。

## 基礎の基礎から訓練漬けの毎日

横浜海上防災基地の訓練施設に響く若々しい声。その主は青い出動服の特救救難隊新人研修隊です。新人研修隊といえども潜水士のキャリアを持つ救助のエキスパート。より難度の高い特殊な海難救助を目指す全国の潜水士の中から選ばれました。

「よし、かかれ!」

始まったのは、負傷者を担架に収容し吊り上げる基礎訓練。隊長大黒真司の号令のもと、負傷者の体が担架からずれないようにロープで固定していきます。

「あぶみ（負傷者の足底を担架に固定するロープ）が機能してないぞ」と指導官である副隊長佐藤栄将の指摘に何度もやり



米山 将平 26歳

中学時代に海上保安庁の施設見学に行ったのが潜水士になるきっかけ。横浜で特殊救難隊と触れ合ううちに自らも志願することに。趣味の音楽で休日にはリフレッシュ。



佐藤 卓也 28歳

新潟で漁師をする祖父に憧れ海の仕事を志す。大学在学中はライフセービング部のキャプテンを務め、「人を助ける」ことへの関心を募らせた。趣味はサーフィン。

直し、なんとか吊り上げられる強度で固定できましたが予定時間オーバー……。

「集中すると周りが見えなくなる。周囲の状況をもっと的確に把握しなければ」と救急救命士の資格を持つ福永昌恭。

米山将平も「潜水士とは段違いの専門性に圧倒されっぱなし。ゼロから詳細に復習し、隙間なく知識と技能を埋め込んでいまい」と語ります。

## 「訓練でできないことが現場でできるわけがない」

「訓練とはいえ教えるだけではなく、自身の持つ知識や経験から最適な方法を考え、行動することを重視しています」と、隊長の大黒が語るように、研修は実践的。次の荷物の吊り上げ訓練では、新人研修隊員が自ら器材を選定し、縄掛け方法を考え、実際に吊り上げが完了するまで一連の流れで行っていきます。



増岡 和明 27歳

人を助ける仕事を志す中で、映画「海猿」で特殊救難隊の存在を知る。将来の目標は「冷静な判断のできる隊長」。休日は同期との飲み会でリラックス。

増岡和明も「基礎とはいえ専門的で、結び方ひとつ、動きひとつに意味があります」とその難しさを語ります。その結果、時間がオーバーしたり、吊り上げに失敗したり……。何より重要なのはその後です。失敗した原因を指導官や同期の隊員からの指摘を受け自ら考察し、解決方法を見いだす、できるまで繰り返します。

## 共に成長する同期が心の支えに

協力し合ってミッションを完遂することもあれば、ときに個人力が求められることもあります。数々の障害を乗り越え、救難現場にいち早く到達するのもその一つ。そのため訓練の一つが「レンジャーサーキット」で、一人一人タイムを計り競います。特に素早

もっと知りたい!! Vol.02  
特殊救難隊新人研修隊



吊り上げ訓練



荷物の吊り上げ訓練では、マットレスを使い、研修施設の最上階まで、いかに効率的に迅速に吊り上げられるか、その方法を自ら考える。「やはり隊長、副隊長の早さにはかなわない…」とのこと。

担架訓練



担架救助訓練。ヘリコプターと連携した吊り上げ救助だけではなく、ロープを使用し崖上からの救助も行う。



谷口 史敏 28歳

海と船、泳ぐことが好きという理由から潜水士に。細身な身体と俊敏さを強みとし、船内活動などで活躍。レンジャーサーキットは常にトップ。趣味は一人カフェ。

「オレンジベレー帽」を目指し、実践的な訓練が始まる。陸上以外にも水中での訓練も頻繁に行われています。「素潜りで10mの水深にある装備を付けて浮上する」「相方と一つのタンクの空気をシェアするパディブリージング」など、どれも過酷な訓練

「誰にも得意不得意があり、心身ともに限界に近い状態です。同期同士で励まし合うことで乗り越えられていることは多いです」と佐藤卓也。競い合い、個々の技能と結束力を高めています。

さを得意とする谷口史敏は「技術、知識、体力どれをとっても誰にも負けたくない。そうやって競い合う気持ちがある成長につながるように感じます」と闘志をみなぎらせています。屋上まで階段を駆け上がり、懸垂で壁を移動、縄梯子の下をつたい、柵下のよつな狭い場所も俊敏に動くことが求められます。先にゴールした隊員も、他の同期の隊員に声援を送ります。



福永 昌恭 26歳

救急救命士。過酷な現場でも活動できる「けがせず、力強くあれ」という上司の言葉を信条とする。休日は健康ランド通いで日頃の疲れを流す。

「オレンジベレー帽」を目指し、実践的な訓練が始まる。陸上以外にも水中での訓練も頻繁に行われています。「素潜りで10mの水深にある装備を付けて浮上する」「相方と一つのタンクの空気をシェアするパディブリージング」など、どれも過酷な訓練

「誰にも得意不得意があり、心身ともに限界に近い状態です。同期同士で励まし合うことで乗り越えられていることは多いです」と佐藤卓也。競い合い、個々の技能と結束力を高めています。

ばかり。

谷口は10kgの重りを持つての立ち泳ぎの際に水を飲み、パニックになりそうになつたこともあるといいます。「訓練を通じて自分を客観視することで克服し、今は厳しい現場でも冷静さを保つ自信があります」と訓練の効果を語ります。佐藤も「特殊救難隊の使命の一つが『生きて戻れ』です。巡視艇でも救助活動はありましたが、特殊救難隊の現場は常に生死の境ギリギリであり、その過酷さを改めて実感しています」と語りま



レンジャーサーキット



強みを見いだして欲しい。得意分野の能力を伸ばすことで、個人と隊の総合力が高まると信じています」(大黒隊長) 11月には研修修了式が行われ、特殊救難隊員として新たなスタートを切る予定です。その際には「研修修了書」の授与、そして一人前の特殊救難隊員の証である「オレンジベレー帽」が手渡されます。5名の新人研修隊員は自身の限界の向上に向けて、今日も過酷な訓練に挑んでいます。

強みを見いだして欲しい。得意分野の能力を伸ばすことで、個人と隊の総合力が高まると信じています」(大黒隊長)



最上階まで駆け上がり、縄ばしごを使って屋上まで出たときにはもう腕がパンパンな状態。屋上でも数々の障害を経て、室内に戻ってもさらに高度な障害は続く。隊長や隊員たちの激を受けながら途中失敗しても何度でもやり直す。

